

# サルコリの養女丸山徳子の音楽科教育思想に関する研究

—— 丸山洋子・鶴田昭則の証言を基盤として ——

藤田文子\*

(2022年10月21日受理)

A Study on the Educational Thought of the Music Department of Tokuko Maruyama, Sarcori's Adoptive Daughter: Based on the Testimonies of Yoko Maruyama and Akinori Tsuruta

Ayako FUJITA

キーワード:音楽科教育思想,サルコリ,丸山徳子,丸山洋子,鶴田昭則

本論文は、先行研究の捉えなおしを基に、筆者の歌唱指導研究をさらに進め、今までの歌唱指導研究の総括を目的とする。昨年度の全学教職センター紀要では、サルコリ、丸山徳子、三浦環、鶴田昭則、丸山洋子を再び取り上げ、サルコリから始まった、彼らの音楽科教育思想の流れを手掛かりにサルコリの音楽科教育思想について検討した。本論ではこういった研究をさらに進め、現在にも通用するサルコリの養女丸山徳子の音楽科教育思想とは何かを検討することを目的とする。昨年同様、丸山徳子の娘の丸山洋子や、丸山徳子の直接の弟子であった鶴田昭則へのインタビューを基盤に、現代にも通ずる丸山徳子の音楽科教育思想について考察した。その結果、丸山徳子の音楽科教育思想については、昨年度確認したサルコリの音楽科教育思想の理解と継承を含むものの、日本という国柄や、時代という事、地域性を十分踏まえて展開しており、丸山徳子ならではのオリジナリティーを持っていたことがわかった。また、娘の丸山洋子、鶴田昭則においても、サルコリや丸山徳子の音楽科教育思想の理解と継承を含むものの、各人の個性を十分勘案した、オリジナリティーに富む、独自の視点での音楽科教育思想が展開していることがわかった。

## はじめに

筆者は、今まで、音楽科教育における歌唱指導に焦点を置いて研究を進めてきた。

そこでは、渡辺陸雄<sup>1)</sup> 原田博之<sup>2)</sup>などといった先行研究、米山文明<sup>3)</sup>らの発声教育といった先行研究などを吟味し、それら、先行研究の捉えなおしを基に、自らの研究、すなわち発声教育<sup>4)5)</sup>、音楽科教育における歌唱指導の研究<sup>6)</sup>、新旧の学習指導要領関連の歌唱指導研究<sup>7)</sup>、それ等と同時に、

---

\*茨城大学教育学部音楽教育教室

それらを裏付けるものとして、一連のサルコリ<sup>8)</sup>関連の歌唱指導についての研究を進めてきた<sup>6)</sup>  
9)。

特に昨年も一昨年同様、折からの新型コロナウイルス感染予防のため、鶴田昭則<sup>10)</sup>(以下、鶴田と略記)とのメールによるインタビューを基盤に、サルコリの弟子の三浦環<sup>11)</sup>、サルコリの養女丸山徳子<sup>12)</sup>、鶴田、丸山徳子の娘の丸山洋子<sup>13)</sup>への流れを手掛かりに、サルコリの音楽科教育思想について研究した。ここでは、サルコリの音楽科教育思想に踏み込み、サルコリの音楽科教育思想の普遍的価値として、フレーベルの「父性」の考え方<sup>14)</sup>も射程に入れて検討した<sup>15)</sup>。

そしてこの研究は、歌唱教育、しかも音楽科教育の本質に関連するもので、筆者のライフワークである、「今しか残せない、教育的にも、歴史的にも重要な事実・資料を吟味し、検討し、保存していく」という研究主題に繋がっていた<sup>16)</sup>。

今回は、昨年のこういった流れを踏まえて、それらの総括として、サルコリの音楽科教育思想が、結果として、現実の歌唱指導、音楽指導の中でどのように展開していったのかを考察することとする。

その際、現在も、サルコリ、サルコリの養女丸山徳子の歌唱指導、音楽科教育思想を継承している、丸山洋子、鶴田の証言を基盤として、丸山徳子の音楽科教育思想を浮き彫りにすることとする。

なお、丸山徳子は、102歳で天寿を全うするまで、特に結婚してからは、演奏を停止し、こういった一連の歴史的事実には一切口を閉ざし、後進の育成に当たっていたことを付記したい。

従って本論では、1.丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想について、2.丸山洋子における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——、3. 鶴田昭則における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——、4. 丸山徳子の音楽科教育思想について——現代にも通じる音楽教育思想の普遍的価値を中心に——、5. 1.~4. についての考察、まとめにかえての順に検討することとする。

なお、本論文は、こういった経緯の中で、当初、丸山徳子の娘の丸山洋子、鶴田への、対面でのインタビューを中心に展開するということが計画されてきたが、折からの新型コロナウイルス感染拡大予防のために、昨年、一昨年同様、主にメール等でのやり取りによって本論が展開することをお許しいただきたい。

そういった意味で、本年も藤田から鶴田への質問と回答という形で論文が展開することもご了承ください。また資料等の入手に関しても制限が多くあったために、現在検討可能な内容に留めたこともご理解いただきたい。

また、鶴田の回答に関しては、カンマ等も含めて、鶴田の表記に極力従ったことも付記しておきたい。丸山洋子に関しては、ご高齢であること、新型コロナウイルス感染拡大予防の見地からも、電話等による、鶴田を介してのご質問、ご意見、ご回答などという形をとらせていただいたことをお認めいただきたいと思う。

以下、1.から4.において、インタビュー記録として、丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想、丸山洋子・鶴田の音楽科教育思想、最後に丸山徳子の音楽科教育思想について、鶴田を介して披歴していただくこととする。

## 1. 丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想について

藤田 鶴田先生に聞かせていただいた鶴田先生に対する丸山徳子先生のレッスン風景(録音)ですが、鶴田先生が当時 52 歳であったという年齢を全く感じさせないものでした。特にトスティ<sup>17)</sup>作曲の歌曲“セレナータ<sup>18)</sup>”などは、圧巻でした。

若々しく、ベルカント<sup>19)</sup>の、エネルギーに溢れた、それでいて、ソット ヴォーチェ<sup>20)</sup>も大切にされた歌声でいらっしゃいました。素晴らしい演奏でした。言葉もはっきり聞き取れました。とても自然で、気品に溢れていらっしゃり、響きを大切にされた、生来の鶴田先生の美声が生きていました。

また、丸山徳子先生の、どちらかと言えば、低く、落ち着いた美しい声は、笑い声に満ちた、和気藹々とした雰囲気と相まって、受容的であり、また気品に満ちた、歌唱指導の内容と、自然とマッチするものでした。

発声を含めた、レッスンの展開方法や、認められる声の特徴などがありましたら、お教えいただけないでしょうか。

また、丸山徳子先生のオリジナリティーと思われるレッスンの特徴、レッスンで感じられた音楽科教育思想などがありましたらお教えいただければ幸いです。

鶴田 発声については、非常に細やかです。例えば、ドレミファソラシドレドシラソファミレドー(半音ずつずらす)この時の丸山先生のピアノは、レガート奏で音が大変きれいでした。

当然、認められる声は、ひびきとして自由性があり自然さが求められ、当然どなるような高音は全く認められませんでした。又、丸山先生のオリジナリティーと思われるレッスンの特徴を述べてみますと、例えば、イタリア古典歌曲カロミオベン<sup>21)</sup>ならば、発声上工夫した所などを曲の中で「どう生かすか」指摘されます。やはり「ひびき」についての大切さと共に「発音と言葉」についても自然さが求められました。

心に残っていることは、曲の中での高音について「大きな声を出しなさい」というより「ひびきそのものが重要」といつも静かな声で話されていたので、このことこそ、「考えさせながら学習する」という教育の基本を述べられていたのは間違いないと思っております。

## 2. 丸山洋子における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——

藤田 丸山洋子先生において、現在の教育活動の中に感じられる丸山徳子先生の音楽科教育思想は、ありますでしょうか。そしてそれはどのようなものでしょうか。

鶴田 丸山洋子先生は、十分に持っておられます。徳子先生が、ご高齢になり体調を崩された時、ピアノは洋子先生が代わって教えられたとのことです。徳子先生と相談されての方法であるのは勿論のことです。生徒さんは、小学生・中学生・高校生が中心でありましたが、大人の方もおられたとのことです。かなり長くその状態が続いたようですが、洋子さんが私に直接語られたことの中に、時間がかかっても真面目にコツコツと努力する子どもが大切と話していました。

そして、叱るよりは【ほめること】が一人一人が伸びることにつながると話されていました。内

容的なことですが、技術を伸ばすには、歌を歌うという感覚がもっとも大切とも話されています。これこそ、音楽科教育思想ではないでしょうか。

### 3. 鶴田における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——

藤田 鶴田先生において、現在の教育活動の中に感じられる丸山徳子先生の音楽科教育思想は、ありますか。そしてそれはどのようなものでしょうか。

鶴田 丸山先生からのレッスンは、私の教育者としての基本を教えていただいたものと思っております。それも人間の本質に迫る音楽という感性的な教科を選ぶことができたのも丸山先生のお陰です。

私自身、23歳で中学校教員になり、当然、悩みもありましたが、小・中学校の子どもたちと一緒にいることのできる環境にあることに感謝しながら仕事をしていました。その間、高校時代から続けて教わっている丸山徳子先生の声楽のレッスンは、どれほど大きいことであったか、測り知れないものがあります。

今述べようとしていることは、私自身のことで申し訳ありませんが、小さなコンサートを続けています。これは、丸山先生没後一周年に行ったコンサートを機に続けているものです<sup>20)</sup>。

そして又、これはつくば市の行事ですが、2006年に始まった「つくばで第九」に17年続けて関わっています。プロの方・アマの方一人一人が工夫し合い・生かし合いながら行っています。いつの間にか、12月29日が公演日になり「つくばで第九の日」と呼ばれるようになっていきます。

### 4. 丸山徳子の音楽科教育思想について ——現代にも通じる音楽科教育思想の普遍的価値を中心に——

藤田 丸山徳子先生において、現代にも通じる音楽教育思想の普遍的価値はあるとお考えでしょうか。そしてそれはどのようなものでしょうか。

鶴田 大正12年徳子先生12歳の時、関東大震災で東京の先生の家が焼失し、何かとつながりのあったサルコリー先生の家にお世話になったとのこと。その時からサルコリー先生からのレッスンが始まり、25歳ころまではサルコリー先生と共にイタリアに渡り歌手として活躍することを夢見ていたのではないかと思います。この時期に徳子先生はサルコリー先生の養女になっています。昭和11年サルコリー先生が病気で亡くなられ、三浦環先生のお薦めで徳子先生は昭和12年に結婚され、ご主人(丸山様)の仕事上、上海に渡られたとのこと。そこにおかれましても、夢の実現に向かって歌い続けておりましたが、戦争が激しくなるばかりで、昭和16年からは音楽的な生活は全くできなくなったとのこと。そして、昭和20年の敗戦を機に、生活は全く違うものになってしまったとのこと。上海から家族全員で帰国。住むところは、昭和20年当時玉里村と言われた所です。(現在は小美玉市栗又四ヶ) 先生のお父さんがお生まれになった宮田のすぐ隣です。栗林に囲まれた一軒家といってもよい所でした。私は、高校2年の時、そこを訪ね、徳子先生から声楽のレ

ッスンを受けるようになったのでその雰囲気をよく覚えています。

今は、洋子さん・そして、徳子先生の実子である修さん(ピアノ調律師)がそこに住んでおられます。先生の過ごし方は、声楽とピアノを教えることが仕事であり、舞台に立つことはなかったようです。しかし、先生の音楽科教育思想とは何かと問われれば、あのような自然の中で、サルコリ先生音楽観を一人一人に伝えていただいたことにあると思っております。

## 5. 1.~4. についての考察

以上、藤田の質問に対する鶴田の答えを通して、1.丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想について、2.丸山洋子における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——、3. 鶴田における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——、4. 丸山徳子の音楽科教育思想について——現代にも通じる音楽教育思想の普遍的価値を中心に——の順で検討した。

ここで、5. として、これらの特徴について、考察することとしよう。

1.丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想について、では、発声における、細やかな指導が指摘されている。例えば、ピアノを使って発声を指導する教員は多いが、自身のピアノ奏法について、注意を払わない者もいる。筆者の数少ない経験で恐縮であるが、たたきつけるようなピアノ奏法で発声を指導している教員の姿も散見される。ここでは、鶴田の言によれば、「丸山先生のピアノは、レガート奏で音が大変きれいでした」とされている。やはりここにおいても、理想とされる音楽があったと言えるであろう。

また、声については、「ひびき」が重要視され、「自由性」、「自然さ」が求められるとされている。つまり、十分に制御された声が求められていたと言えよう。叫ぶ、怒鳴るなど、エレガンスの立場から言えば、認められないものは、通常の場合、排除されていたと考えてよいのではないだろうか。

こういった「ひびき」を大切にする丸山徳子のレッスンであったが、学習方法は、やはり創意工夫であったとされている。鶴田によれば、「発声上工夫した所などを曲の中で『どう生かすか』指摘されます」とある。ここでもやはり、音楽科において重要視される、学習の「仕掛け」に繋がる姿勢が感じられる。学習の有機的な相互連関があった、レッスンが、音楽科教育思想のみならず、一つの、普遍的な教育的価値を持ったものであったと言えるだろう。

また、ここでも、鶴田によれば「『ひびき』についての大切さと共に『発音と言葉』についても自然さが求められました」とある。

最後に、鶴田が、「心に残っていることは、曲の中での高音について『大きな声を出しなさい』というより『ひびきそのものが重要』といつも静かな声で話されていたので、このことこそ、『考えさせながら学習する』という教育の基本を述べられていたのは間違いないと思っております」と締めくくっていることでもわかるように、こういった音楽科教育思想から言えば、教えるという行為が、丸山徳子の捉えている「音楽とは何か」に深く根差していることがわかる。

つまり、丸山徳子は、大声や、怒鳴るなどの行為で、本来音楽が持っている価値から離れてしまいがちな、劇的な表現が求められている箇所、で、「ひびき」という一見矛盾する、つまり二律背反的

な提案をすることで、学習者の中に余分な力み、気張りなどがなくなり、声という事について、もう一度捉え直す機会を与えているのではないか。

初心者などでこのことが難しく感じるならば、力まず、「小さなメカニズムに静かに息を流す<sup>23)</sup>」、「息にのせる<sup>24)</sup>」といった行為から始めるとよいであろう。学習活動の結果としての「ひびき」なのである。丸山徳子にとって、初めから「ひびき」に執着し、しかも執着しすぎて、かえって力むという現象が起きることは避けたいことであつたのであろう。あくまで、自然に生まれる結果としての「ひびき」が望まれていたと言えよう。

しかも鶴田によれば、「いつも静かな声で話されていましたので」と丸山徳子の教え方にも言及されている通り、すべてが有機的な、しかもひとつながりのものとして存在している。

最後に、丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想であるが、以上でわかるように、日本という国や、時代、地域性を十分に考慮した、普遍的価値を持つものであつたことがわかる。

なお、誤解を避けるために付け加えるが、鶴田からの直接の聴取によれば、こういった事情を勘案すれば、「ひびき」が仲立ちとなって、ダイナミックなフォルテ(フォルティッシモ)の表現も、ソット ヴォーチェのピアノ(ピアニッシモ)の表現も、同じエネルギー量が必要になってくることであつた。

このことが、丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想のオリジナリティーと言えよう。

次に、2.丸山洋子における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——、であるが、ここでも、多くの音楽科教育思想における普遍的な教育的価値の存在が感じられる。

鶴田によれば、丸山洋子の音楽科教育思想として、「時間がかかっても真面目にコツコツと努力する子どもが大切と話していました」とある。

子どもの成長が、仮に子ども一人の中だけであつても、確実に感じられる学習、すなわち日夜、少しずつ、着実に努力を続け、前進する姿勢、このことは、特別支援学校等でも重要なファクターとなる。

ともすれば、特にコンクール等で、結果主義に陥りがちな音楽科教育の実態において、ゆるぎない「自己肯定感」と共に、こういった学習ができる子どもを育てるといふ、丸山洋子の音楽科教育思想こそが、普遍的価値を持つと言えるであろう。

コロナ禍の現在、心を落ち着けるあり方として注目すべきであろうし、生涯学習<sup>25)</sup>の見地からすると、死ぬ瞬間までが学習といった捉え方も必要であろう。

これらに繋がっていくものとして、鶴田による丸山洋子の「叱るよりは〔ほめること〕が一人一人が伸びることにつながると話されてきました」といった証言は重要なものとなってくる。

「教える」という行為とは何か？

この言葉は、音楽科教育に携わる、すべての人間が常に反芻しなければならない命題である。

すなわち、先に述べた、ゆるぎない「自己肯定感」は、こういった「褒める」といった行為のみによって、もしくは本人(の音楽)を否定しない、信頼関係の無いところで叱らない、学習者本人のわからない内容を教えないといったことによるのみ持続可能なのではないかと、筆者は考えるからである。

現在、教育現場では、実際、教員・学生共に心を病んでいる、もしくは病んでいくケースが非常に多い。

叱る、叱られる、批判する、批判されるとはどういうことか。

教員・学生共にじっくり考える必要がある。

信頼関係があつてこそ、また、成熟した文化があつてこそ、叱る、批判する、さらに言えば、教育するという行為は価値を持つのではないかと、筆者は考える。

筆者は、良好な教育が成立する条件として、信頼関係というものがあるように思う。

子どもや学生の「信じる」、という行為をもたらすものとして、やはり、他者を認める、「ほめること」という行為が必要であるように思う。

目の前の人間の良いところを見つける、そして「ほめること」は、教育において、必要不可欠であり、その価値は普遍的であると考えられよう。しかしながら、こういった普遍的価値を持つ「ほめること」という行為が、現代程求められている時代は無いように、筆者は考えている。

教員の「ほめること」が詭弁か、詭弁でないかどうか、子どもたちは、直ぐ見抜いていくものである。

安易に、人間関係の中にディベートを取り入れるとどうなるのか。それは、大きな危険を含むものとなる。

教育という行為の基盤にあるのは、やはり子どもに対するゆるぎない教員としての、はっきり言えば人間としての「愛」であることを忘れてはなるまい。そしてそれは、あくまで受容的な態度を必要とする。

やはり、受容的な態度は、教育の営みにあつて、必要なことであろう。

また、鶴田によれば、丸山洋子は、「内容的なことですが、技術を伸ばすには、歌を歌うという感覚がもっとも大切とも話されています」としている。

筆者は、ピアノのレッスンであった(たしかピアニストの高山三智子<sup>26)</sup>(以下、高山と略記)のレッスンであったか)が、どうしても(技術的に)出来ないところを、歌うように教えられた。

その時は、バッハ<sup>27)</sup>の曲であったように記憶しているが、歌うと何故か出来た。

高山にも褒められた。

こういったことを勘案すると、やはり、歌うという行為が自然に根差すものであり、技術修得には必要欠くべからざるものであるように思える。

こういった丸山洋子の音楽科教育思想は、普遍的であり、かつ現在という時代が求めるものであったと考えられないであろうか。

このことが、現在の教育活動を中心に考えた場合の、丸山洋子における丸山徳子の音楽科教育思想のオリジナリティーと言えるであろう。

次に、3. 鶴田における丸山徳子の音楽科教育思想について——現在の教育活動を中心に——について確認してみよう。

ここでは、特に、「私の教育者としての基本を教えていただいたものと思っております。それも人間の本質に迫る音楽という感性的な教科を選ぶことができたのも丸山先生のお陰です」と、鶴田は述べている。

しかも、23歳で中学校の教員になってから、「高校時代から続けて教わっている丸山徳子先生の声楽のレッスンが、どれほど大きいことであったか、測り知れないものがあります」とある。

どうやら、鶴田の中で、丸山徳子のレッスンは、音楽科のみならず、教育という営みの中で、大

きな役割をするものであったように思う。

音楽そのものへの理解、歌唱指導、生涯学習、人間としての生き方まで、私は、鶴田にとって、教員としての丸山徳子が理想であったように思う。

鶴田には、丸山徳子が、知らず知らずのうちに、レスナーとしてのみならず、人間として、模範であり、尊敬の対象として、存在していたというのが正直なところではあるまいか。

筆者は、鶴田の言う、小さなコンサートも、「つくばで第九」も、実は、口にしたかどうかは別に、丸山徳子の中では、想定内のことであったと思っている。

こういった、鶴田の成長を読んで、レッスンをしていた、というのが、丸山徳子において、真実に近いのではないだろうか。

この丸山徳子の教員としての資質に、十分応える形で、誠実に成長していったという事が、現在の教育活動を中心に考えた場合の、鶴田における丸山徳子の音楽科教育思想の、オリジナリティーと言えるであろう。

最後に、4. 丸山徳子の音楽科教育思想について——現代にも通じる音楽教育思想の普遍的価値を中心に——について述べることにする。

鶴田によれば、「先生の過ごし方は、声楽とピアノを教えることが仕事であり、……先生の音楽科教育思想とは何かと問われれば、あのような自然の中で、サルコリー先生の音楽観を一人一人に伝えていただいたことにあると思っております」とある。

この点では、1.丸山徳子のレッスンにおける音楽科教育思想について、で述べたことが、再び想起されよう。

「ひびき」の重視、「自由性」、「自然さ」といったことが求められていた。

また、学習は、創意工夫して得られた内容を、曲の中で、どのような形で生かすかといったことに収斂される。

こういった丸山徳子の学習方法は、平成29年に告示された、特に現在の音楽科関連の、学習指導要領にある『『創意』工夫』といった文言にも通じるであろう<sup>28)</sup>。

先取りと言ってもよい、先進的な考え方、しかも普遍的である。

やはり、丸山徳子の音楽科教育思想は、自然に恵まれた環境ゆえに守ることができた、サルコリーの音楽科教育思想の発露という事が言えるであろう。

日本という国柄、時代という事、地域性を十分考えた末の丸山徳子の音楽科教育思想であった。

このことが、現代にも通じる音楽科教育思想の普遍的価値として、丸山徳子の音楽科教育思想におけるオリジナリティーと言えるであろう。

## まとめにかえて

筆者が、数年前、サルコリー、丸山徳子、三浦環、丸山洋子、鶴田自身について、こういった音楽科教育思想をテーマに、初めて鶴田からお伺いしたとき、本当に実在するのか、信じられない思いであった。

夢ではないのか。



現代の桃源郷ともいうべきものがあるのか。

誰もが夢見る、調和に満ちた世界、愛に溢れた世界、それが音楽の中に展開している。

しかしながら、ここ数年、鶴田を通して、こういった音楽科教育思想について研究するという機会に恵まれ、その中に現れた姿は、最初に筆者が考えていたこととは、全く違っていた。

各々の立場で現実をしっかりと見つめ、現実根差し、しっかりと根を張っている。しかも、丸山徳子の実子である丸山修も含め相互補完的に独立している。

筆者は、守るものがあるとはどういうことか、はっきりと見せつけられた気がした。

本当に現実にあったことなのだ。

ここで、丸山徳子の実子である、ピアノ調律師の丸山修<sup>29)</sup> のことも初めて知った。



(鶴田が、丸山洋子から贈呈された、サルコリ愛用の時計:鶴田提供)

丸山修は黙して語らぬけれども、丸山修無しには、丸山徳子、丸山洋子の存在は語れないであろう。

今回、鶴田が、丸山徳子を通して贈呈された時計の音を、筆者が、電話越しであるが、聞かせていただいた時、やはり思った。

この音楽科教育思想は、紛れもない、現実のものなのだ。

しかも、この音楽科教育思想は、関係者の知恵と、血と汗と涙の結晶、努力の結晶、すなわち愛の顕現なのだ。

軽快で、しかも、気品のある、明るい、時を刻む時計の音であった。

サルコリが認めた、サルコリを象徴する音、さらに言えば、サルコリそのもののような気がした。

サルコリ亡き後も、丸山徳子がずっと持っていた時計の音はこれなのだ、すぐにわかった(ちなみに、左側に、鶴田から提供していただいた、この時計の写真を掲載させていただいた)。

今後も、筆者を含め、サルコリ、丸山徳子、丸山洋子、鶴田昭則の音楽科教育思想を実践面でも、また、理論研究の面でも、竿頭一歩進めることを課題とする。

## 謝辞

今年も、丸山洋子先生、鶴田昭則先生はじめ、研究に関わってくださったすべての方々に感謝いたし

ます。

ありがとうございました。

## 注

- 1) 渡辺陸雄 浅香淳編集『小学校音楽教育講座第6巻音楽科基礎指導法 | 歌唱 | 』（音楽之友社, 1982), pp. 40-55.
- 2) 原田博之「西洋音楽の発声によるうた—日本語の特性を活かした歌唱に向けて」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 8 no. 1 (通巻 15 号), 2010, pp. 24 - 30.
- 3) 米山文明『一日 5 分のトレーニングで声と歌にもっと自信がつく本』（三笠書房, 2002), pp. 37-40.
- 4) 山口(藤田)文子「声帯の健康の立場から考えた小学校音楽科の「歌唱」について —米山文明『一日 5 分のトレーニングで声と歌にもっと自信がつく本』を手がかりに—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』(茨城大学教育学部)56号, 2007, pp. 131-139.
- 5) 山口(藤田)文子「発声に関する研究: —音楽科教育の立場から発声教育の必要性に鑑みて—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』(茨城大学教育学部)第57号, 2008, pp. 67-72.
- 6) 鶴田昭則、内野健太、藤田香織、山口(藤田)文子「音楽科教育における歌唱指導の研究 —幼稚園, 小・中学校, 高等学校に共通する内容を中心に—」『茨城大学教育学部紀要(教育総合)増刊号(茨城大学教育学部), 2014, pp. 67-84. など.
- 7) 山口(藤田)文子「新旧幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領の音楽科に関する内容と教育方法の特色と課題」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』(茨城大学教育学部)67号, 2018, pp. 189-196.
- 8) Adolfo Sarcoli 1872 シエナ〜 1936. 3. 12 東京 イタリアのテノール歌手。イタリア各地でオペラに出演し、名ソプラノのテトラツィニーの相手役もしたが、来日。イタリア・オペラの名曲と、ベル・カント唱法を日本に伝え、声楽界に貢献した(下中弘編集『音楽大事典第2巻』[平凡社, 1982]p. 981. 参照)。演奏としては、マスカーニ作曲「カヴァレリア・ルスティカーナ」の三浦環、サルコリの二重唱におけるA.サルコリの演奏がある(『伝説のプリマ・三浦環デビュー盤から最後の演奏まで』(VINTAGE, SYC-1001)。詳しくは、本論文注6) 前掲論文 pp. 70, 71. に鶴田によって、三浦環の師、丸山徳子の養父、師として詳しい説明が示されている。参照されたい。
- 9) 藤田文子「音楽科における歌唱指導に関する歴史的研究 —から、三浦環の師、サルコリの養女丸山徳子・鶴田昭則のレッスンを手掛かりに —」『茨城大学教育実践研究』(全学教職センター)39(2020), pp. 69-76.
- 10) 茨城大学教育学部音楽科卒業。公立中学校・茨城大学教育学部附属中の音楽担当教諭、茨城県教育庁指導主事、小学校長などを務めた。イタリアの歌、日本の歌・童謡を研究し、ベートーベン第九のテノールソロを担当。小・中学校の校歌作曲も多数。前茨城大学非常勤講師。茨城県教育研究会音楽教育研究部長、茨城県吹奏楽連盟県南地区会長、つくばで第九実行委員長、ムジカ・

ひびき代表、日本の歌・童謡をうたう会代表、音楽教育推進協議会常任理事、茨城大学楽研(音楽専攻)同窓会会長などを歴任。著書・論文も多数。

- 11) みうら たまき 1884(明治17) 2.22 東京～ 1946.5.26 同地 ソプラノ歌手。旧姓柴田。1900年 東京音楽学校入学、本科声楽科、のちに研究科に進んだ。ユンケルに師事。03年邦人歌手のみによるオペラ公演出演後、東京音楽学校助教授となる。10年帝国劇場歌劇部教師として招かれる。11年<カヴァレリア・ルスティカーナ>部分上演にサルコリとともに出演。13年医師三浦太郎と結婚し、14年夫と共にドイツ留学。第1次世界大戦のため、ロンドンにのがれ、アルバート・ホール のデビューに成功。翌15年ロンドンで<蝶々夫人>に出演、その成功が契機となって渡米。ブッチーニの知遇を得る。22年(大正11)帰国。全国巡演ののち、渡欧。35年イタリアのパレルモで<蝶々夫人>出演 2000回の記録をつくり帰国。36年歌舞伎座で<蝶々夫人>出演 2001回記念公演。翌年の大阪公演より彼女自身の邦訳歌詞を用いた。彼女の声は清澄で美しく、派手な演技と相まって好評を得た。日本最初の国際的なプリマ・ドンナ。門下には原信子、関谷敏子らがいる。著書に<世紀のオペラ>(1912、大正1)、訳書にベラスコの<歌劇お蝶夫人>(1937、昭和12)がある(下中弘編集『音楽大事典第5巻』[平凡社、1983]p.2437.参照)。
- 12) まるやま とくこ 1911～2014 ソプラノ 鶴田の師。現茨城県小美玉市宮田に生まれる。幼少時、父が新聞社に勤めていた関係で家族共々東京で生活する。1911年(明治44年)にイタリアを代表するテノール、サルコリが横浜に渡ってくる。その頃、丸山の叔母がイタリア大使館で仕事をしており、その後東京に住むようになったサルコリの家政婦になる。12歳の時(大正12年)に東京大震災が起こり丸山の家が焼失したため、東京のサルコリの家に叔母とともに住むようになり、女学校に通う。サルコリには何かと気に入られ、後に養女として迎えらる。サルコリのもとには、ソプラノ三浦環をはじめ多くの歌い手がレッスンを受けに来ていた。そのような音楽的環境にあふれる中で、自然に本格的に歌唱指導を受けるようになった。又、東洋音楽学校(現東京音楽大学)にも通い、小さなコンサートにも出演した。25歳頃まではサルコリにレッスンを受けていたが、1936年サルコリが没した。しばらくして、欧米で活躍していた三浦環が帰国し、オペラ「蝶々夫人」において蝶々さんが三浦環、スズキが丸山という共演も実現した。その後、結婚を機に上海に渡ったが、そこでの音楽的環境は、太平洋戦争の影響もあり恵まれたものではなかった。戦後、家族共々生まれ故郷の宮田に戻り、現小美玉市栗又四ヶに住むようになる。戦後のきびしい音楽的事情と家庭的な事情もあり、オペラ活動は全くしなかった。後半は、声楽(ベルカント唱法による指導)やピアノの指導者として活動する。2014年1月末日102歳の生涯を閉じた(本記述は本論文注6)の論文 p.70.における鶴田の文章に基づいたものである)。
- 13) 丸山徳子の娘。サルコリと丸山徳子同様、血縁はなかったが、丸山徳子と親子関係を結ぶにあたって、篤い信頼関係を築いた。現在まで、丸山徳子を通してサルコリの、また、丸山徳子の音楽を継承し、ご自宅で音楽を教えている。生母が亡くなったため、丸山徳子を、母として受け入れるにあたり、長女として、受け入れを真っ先に決断した、先見の明のある重要人物でもある。
- 14) フレーベルの教育思想に取り上げられた考え方。『母の歌と愛撫の歌』の扉の絵の説明にある。(Friedrich Fröbel *Mutter und Koselieder* [Mitteldeutsche Verlagsgesellschaft, 1982], S.122. (小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』[玉川大学出版部, 1976～1981年]第五巻、『母の歌と愛撫の歌』280,281頁)。

- 15) 藤田文子「サルコリの音楽科教育思想に関する研究 —— 丸山徳子から、三浦環、鶴田昭則、丸山洋子への流れを手掛かりに、フレーベルの「父性」に関する考え方を射程に入れて —— 『茨城大学教育実践研究』(全学教職センター)40(2021), pp. 37-50.
- 16) 《特集》 シンポジウム「戦後70年と音楽教育史」『音楽教育史研究』(音楽教育史学会) 第18号, 2016, pp. 25 - 59.
- 17) フランチェスコ・パオロ・トスティ(Francesco Paolo Tosti) 1846 アブルツツィのオルトーナ・スル・マーレ～1916 ローマ コンティとメルカダテンテに作曲を学び、ナポリのサン・ピエトロ・マイエラ王立音楽院卒業。声楽教師をする傍ら作品発表を行った。ロンドンで王立音楽院の声楽教授をつとめた(編者 畑中良輔 『トスティ歌曲集』[株式会社全音楽譜出版社], p. 199. を参照)。
- 18) 編者 畑中良輔 『トスティ歌曲集』(株式会社全音楽譜出版社), pp. 76-82. などを参照(出版年に関しては記載なし。p. 199の畑中良輔の言には1976年6月15日とある)。
- 19) 「bel canto[伊]〈美しい歌〉の意味。18世紀に成立したイタリアの一種の歌唱法。劇的表現やロマン的叙情よりも、音の美しさ、むらのない柔らかな響や。なめらかな節回しに重点がおかれている。……高度な芸術的技巧であり、イタリア・オペラやモーツァルトのオペラにはもっとも理想的な唱法とされている」とされている(編集兼発行者 堀内久美雄『新音楽辞典 楽語』[音楽之友社, 1977], p. 526.)。
- 20) 「sotto voce[伊]〈声を和らげひそやかに〉の意味。はじめは声楽のみに用いた楽語であるが、のちには器楽にも用いられるようになった」とされている(同上書, p. 329.)。
- 21) 編著者 畑中良輔 『イタリア歌曲集(1) 中声用』(株式会社全音楽譜出版社), pp. 150, 151. などを参照(出版年に関しては記載なし。はじめにの畑中良輔の言には1971年1月とある)。
- 22) 2015年、鶴田はテノール歌手として、「ソプラノ丸山徳子メモリアルコンサート」を行い、イタリア古典歌曲とトスティを歌った。ここでピアノ伴奏を行ったのは鶴田の茨城大学附属中学校教諭時代の教え子、星子知美であった。星子は、東京藝術大学附属音楽高等学校、東京藝術大学器楽科ピアノ専攻を経て、ウィーン国立音楽大学に留学していた。当時、星子は上野学園大学の講師であった。筆者は、この時の演奏を聴くことができた。会は盛会で、鶴田の演奏はのびやかで、かつベルカントのひびきを大切にされたものであった。観客の感動は言葉にできないほどであった。非常に素晴らしい演奏会であった。
- 23) 本論文注6)掲載の論文、p. 80, 注29)を参照。筆者は、ウィーンのサモーシ教授の弟子で声帯の発声障害を除去することで有名なヴァムザー教授(若い世代のためのヨーロッパ文化運動[E.K.F.D.J.G.]の議長ユッタ・ウンカルト・ザイフェルトの証明書による。藤田は2004年、2005年、2006年の3回、クロイツァー・涼子[レオニード・クロイツァーの姪。声楽家]の招きで来日したヴァムザー教授のゼミナールを受講し、娘 藤田香織と共に2005年にはディプロマを取得した。さらに、この証明書によれば、ヴァムザー教授は、オーストリア連邦共和国大統領より、名誉教授の称号を与えられたとされる)から、この教えを受けた。この言葉は、ヴァムザーからの聴取による。
- 24) 米山文明(東京大学医学部耳鼻咽喉科学教室で、音声言語医学を専攻。医学博士。作陽音楽大学客員教授。日本声楽発声学会理事長などを歴任した[米山文明『声の呼吸法 美しい響きをつくる』(平凡社, 2003)最終頁]によれば、「声を息にのせる」として、「息を出しながらその呼気流にのせ

- て音をつけていく……」という表現がある(同上書, p. 145.)。
- 25) 「ひとは全生涯にわたって教育を受けるべきであり, そのためさまざまな教育は総合的な視点から統一的・体系的に再構成されるべきであるという主張である……この考え方は1965年, パリで開催された第3回成人教育推進国際会議以来急速に世界にひろまった」とされている(編者山田栄 唐澤富太郎 伊藤和衛 大浦毅『教育学小辞典』[協同出版株式会社, 1974], pp. 112, 113.)。
- 26) ピアニスト。「東京芸術大学附属音楽学校を経て, 同大学ピアノ科卒業。……(19[筆者付記])72年モスクワ音楽院にて3年間、……ヤコフ・フリエール教授に学ぶ。研究科修了。……各地で演奏会を行い、……80年にはベルリン室内管弦楽団と共演」とある(CD「ロシアの調べ ピアノ曲集 PRCD-1248」[ビクター音楽産業株式会社, 1991]ジャケット参照)。
- 27) 高山は、バッハ インベンション(Joh. Seb. Bach[1685-1750][編者 全音出版部『バッハ インベンション』(全音楽譜出版社), p. 16. 参照。出版年の記載なし)を教える時、技術的にどうしても出来ない時は、歌うようにと指示をし、筆者は歌った。
- 28) 平成29年告示の幼稚園教育要領、小・中学校、平成30年告示の高等学校学習指導要領には、音楽関連で「工夫」、「創意工夫」という文言が多く使用されている(『幼稚園教育要領(平成29年告示)』(株式会社フレーベル館, 2017), p. 21.、『小学校学習指導要領(平成29年告示)平成29年3月告示文部科学省』東洋館出版社, 2018), pp. 116-127.、『中学校学習指導要領(平成29年告示)平成29年3月告示文部科学省』(東山書房, 2018), pp. 99-106.、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)平成30年3月告示文部科学省』(東山書房, 2019) pp. 141-147. 参照)。
- 29) 昭和19年生まれ。戦中、戦後、丸山徳子、丸山洋子などと、玉里村で、苦楽を共にしてきた。